

私の学生時代

フェンシング部の復活

北島 泰弘

一 来年四月に部として復活する。戦前、昭和十三年頃に喜多見・中谷・金子先輩が創部されたが、外来スポーツの為銃剣道部に強制的に切替えられた歴史があり「復活」と呼ぶ。

二 練習は各自のクラブを主体、優先とするが、技術の交換・向上の為である。

三 塩沢（法三）を委員長とし、西川・田中・劍崎（教二）〔大阪YMCA〕山村（教二）堀口（教二）〔京都クラブ〕の中から、山村・西川を委員にする。

と打合せたのが昭和二十三年十月、場所は御所の芝生の上であった。京都クラブから合流

といっても、実はまだ、主宰者の牧真一先生の御顔も拜んだこともなかった。先生は、その頃から既に多忙で、お宅は伏見だけれど、会社は大阪、しかも出張が多く、その間には国体や全日本の大会に参加されており、十一月の初めにやっと、お会する。一寧ろ捕えることが出来たといった方が、よいかも知れない。京都クラブの練習は、少人数の頃は、当時、藤井大丸の西隣の旭スポーツ店の二階で人員増加に伴って近くの開智・豊園校を借り土曜日に、だんだんと日曜日にも行われた。練習の翌日は足腰が立たず二階へ這上り、階下へはソロソロリと降りねばならないほどで皮膚の弱い私の皮は、柄にすれて、一皮むけてしまったこともあった。レンスンは、全日本選手権者の牧先生から、みっちり仕込まれ、「ラスト・ワン」と声がかかるまでが、なかなか。声がかかっても奇麗なフォームでアタックで一本とれるまで休ませて貰えなかった。この五分間くらいに「アタックのフェンシング」を学んだのだと、今でも思っている。一方、学校の練習は場所がなく、復活申請中とは申せ無籍者の身上、予算はゼロの冷飯喰の状態なのでいろいろと空地を探した。

「屋根附」練習場なんか高嶺の花はおろか夢物語の類であった。構内の小路で曲りくねっていても補装されてあれば極上の部で、早速その場で開店と言う寸法だ。相国寺の本堂前に出張し、女子部のコート、御所にも出没し幼稚園にも潜入した頃は、あまり屋外で練習するので「フェンシングはアウトドアスポーツか」と友人に尋ねられた。

＊

昭和二十四年四月、部は半歳の黙認後、体育会の中に復活した。部長に児玉実用教授を迎え、初代主将に山村修一（舊三）氏、主務に提原が就任。新入部員が何と五十人くらい応募して来たが、新世帯には余り多過ぎるので、三日間はただ走らせるだけにして二十人くらいにしてしまった。練習場は、運動場の北西にある旧武道場跡の工学部教室と指定されたが、授業の済むまで運動場で体操したりして時間を生かした。しかし工学部が済んでもすぐ練習というわけではなく、机を隅に積上げて余地を作り、掃除雑巾がけしてからである。当番制も決めたが、練習の「虫」揃いであったから、制度は自然に立消え、主将古参新人の別がない自発的な参加で道場造りが行

われた。練習後は元通り机を並べて解散であったが、待望の屋根附道場に満足し、感謝していた。技術も発足時の申合せ通り京都・大阪両派の合作であった。相互に習いたての技を公開・交換し、時には喰違ったが、大阪流を甲、京都流を乙と名付けて妥協「ワンツーマ」「ワンツー乙」てな怪しげな号令も飛出したが、誰も笑う者もなく、伝達者の面子を重んじ、部を形成するのに懸命であった。

*

四月二十四日、第一回対関大戦を大阪YMC Aで行い、18-14で初陣を勝利で飾った。関西では、戦後最初のフェンシングの試合なので、新聞は各紙が報道、英字新聞にも載った。五月二十一日、早大（原・斎藤・畑中・越・志村）が西下。練習試合を五人制ブルで行ったが、22-28と敗れた。

当時、剣は配給制で、メーカーも東京一社だけ。関東の売残りが西へ流れたので、すぐに折れそうな線香のように細い不合格品さえ交っていた。だから折れた剣先をテニスガットの糸や帆布でつなぐ修繕技術が関西で大いに進歩したのは皮肉であった。配給減の者は仕方なしに釣竿、竹竿を規定寸法にして形の

練習をしていたが、他所からみれば殺陣の稽古どころか完全な犬殺しスタイルであった。

七月三日、第一回対立教大戦があり、既に斯界に名を成して居た相手校を、牧仕込の強引な攻撃で24対8という大差でやっつけ、新聞は「予想外れ」「大番狂せ」と同志社のアタックぶりを賞めてくれた。

同月八日に常勝將軍と謳われた明治大に對峙。明大の土屋主将、中島副将と飯田・奈良の二選手は、四天王と称され斯界に君臨していた。その年ももちろん関東リーグで優勝していた。現在、斯道の名門校中央大さえもコーチを受けた高野、遠藤の布陣に、背水の陣の同志勢山村・西川・劍崎・堀口は、「どうせ負けのなら」とアタックに次ぐアタックで試合のペースをとり、遂に18-14で、勝利を収めた。名将が名もなき雑兵の手にかかったようなものである。「明治敗る」のニュースは関東に動搖を与えると共に、「西に同志社あり。同志社にアタックあり」と伝えられ、後年、名門・実力校に名を連ねる第一歩となった。「攻撃は最大の防禦なり」「強者として恐れるな弱者として侮るな」とこの試合から得た教訓は非常に大きいものであった。

*

八月の海南合宿や国体予選後に、その日まで、部の復活に献身的な努力をした大阪組の仲間が次々に部を離れて行った。自己の戦績を気にしたり、経済的な理由からであった。「停電」の多かったその頃、真黒闇の中で去る者の心境を聞き、声を励まして慰留に努めた悲しい思い出もある。協会の大阪・京都の対立が、学生界に波及・滲透した節もあり、実に後味の悪い思い出もある。

初参加の国体・全日本で私は二位・四位に入った。当時珍しかったサウス・ポーが幸し日本一の牧先生に師事した賜と思っている。第四回国体直後に片山・山東・片岡・黒田（和）を新たな戦列に加え、上京中には早大・慶応との練習試合に、帰京しては、紅白十人制の第一回対立命戦に勝ち、十二月には宿敵関大を第二回定期戦で返討にした。個人戦や全国的な大会を別として、学校対抗はフルレ一種目だけで、エペ・サーブルのない時代ではあったが、復活第一年目のページを、縦に「勝利」。横に書いて、「victory」の字で埋めたのである。

（昭二七年大経卒・会社社長）